

The Roman of Kitakata



風

に揺れる緑の木立を後ろに、五列に並んだ四十四本の柱が支える吹き抜けの拝殿。荘厳なたたずまいの熊野神社は、会津屈指の古寺である。

社伝「新宮雜葉記」によると、

前九年の役で源頼義が陸奥征討に赴いたとき、その武運を祈って天喜三年（一〇五五）、紀州熊野から現在の河沼郡河東村熊野堂に勧請したのが始まりと伝えられる。その後、前九年の役の際に、父と共に陸奥征討に赴いていた源義家が、後三年の役で再びこの地を訪れ、小松村（のちに新宮と改めた）に移すように命じ、四年間をかけて、寛治三年（一〇八九）に完成した。新宮熊野神社は、最盛期には三百余りの末社を持ち、多数の衆徒、百余人の神職が常住し、東北における熊野の威勢を、全国に知らしめたと伝えられる。源頼朝の時代には、社領十万八千刈を給され、二百余町に近い領田を持っていたが、佐原十郎義連の会津就封によ

り、社寺領の没収を余儀なくされた。その後、新宮氏が芦名氏に討たれてからは、滅亡への道をたどり、慶長十六年（一六一



一）の大地震で、本殿を残してすべての建物が倒壊してしま

う。しかし、慶長十九年（一六一四）に旧材を用いて一回り小さな長床（拜殿）を再建し、江戸時代に入っ

たから、塩川以北の諸組の代表が参列し、現在へと引き継がれた。

新宮熊野神社には、数多くの文化財があるが、その中でも「長床」は、昭和三十八年に国の重要文化財に指定され、昭和四十九年から四年間の歳月と、約一億四千万円の経費をかけて、文化庁の手によって解体修復が行われた。長床は新宮熊野神社の拜殿で、九間（二七・二七）四間（二二・二二）の一重軒の寄棟造り。各柱の上

立する様が見通され、平安の面影を今に伝えている。

また、同じく国の重要文化財で

ある銅鉢は、供物を入れて神仏に供えるための什器であり、「牛王板木」は難よけの護符である。国の重要美術品の「銅鐘」は福島県下で最も古く、その昔処刑場のあった地獄谷には、この鐘の音が届かないという言い伝えを持つ。その他にも、県の重要文化財である「銅製鱧口」や「木造文殊菩薩騎獅像」などの貴重な文化財は、熊野神社のはるかな歴史を物語ってくれる。